小美玉市の歴史を知ろう33

埋められた浄土へのいのり

―骨蔵器と経筒①―

日本での火葬の歴史は、仏教が日本に伝来して百六十年ほど経った文武四年（七〇〇）、僧道昭が初めてと言われています。仏教の教えが広まると、お釈迦さまが火葬されたこともあり、その後、天皇をはじめ、官人や僧侶に浸透し、八世紀後半になると、東国でも、富豪層は火葬墓をつくるようになります。

一方で、十一世紀になると、お釈迦さまの教えが衰える末法思想により、経典を後世に伝え残すため、経塚がつくられるようになります。

火葬された遺骨や経典は、地中に埋められ、長い年月を経て失われることが多いですが、それぞれを納めた容器「骨蔵器」・「経筒」は現在まで残されています。

「骨蔵器」の材質は、階層によって異なり、銅製容器や奈良三彩の壺を用いた高級品から、須恵器や土師器などの日常品を転用したものまで多岐にわたります。

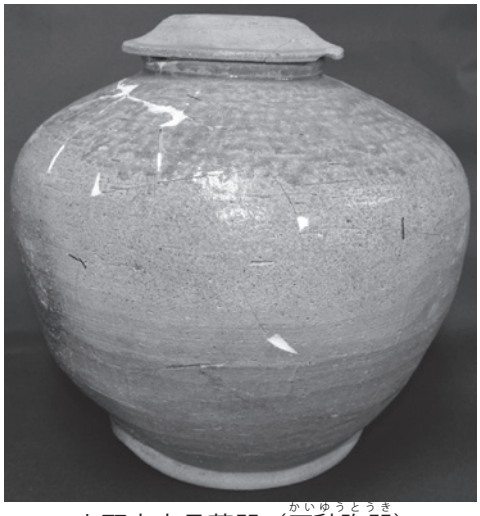
茨城県で発見された「骨蔵器」は二〇〇点近くになるとされ、那珂川流域と霞ケ浦沿岸に大きく分かれて分布しています。両地域とも古代東海道の継地で水運も盛んであり、那賀郡および茨城郡の政治・経済・文化の中心でもあります。霞ケ浦沿岸では、東海地方産の高級品とされた灰釉陶器の「骨蔵器」が数多く出土しています。

小美玉市内では、幡谷・山野・倉数で多くの「骨蔵器」が確認されています。これらの地区には、常陸国府から行方郡、香島郡に至る古代の道「香島道」が通っていたと推定されており、これらを背景にした富豪層が関係しているものと考えられます。

「骨蔵器」と「経筒」をテーマにした玉里史料館巡回展を十二月十六日（土）～一月十五日（月）にかけて四季健康館で開催します。ぜひこの機会にご覧ください。

【参考文献】
吉澤 悟　二〇〇六　第十一回特別展『火葬と古代社会　死をめぐる文化の受容』「火葬の広がりと東国社会」

―骨蔵器と経筒②―は次回の広報おみたま1月号に掲載予定です。



山野出土骨蔵器（灰釉陶器）

倉数字大塚出土骨蔵器（須恵器）

有料広告
募集中！
詳しくは、Web または
下記問い合わせ先へ
Web は「有料広告」で検索
☎：0299-48-1111　内線 1212
（秘書広聴課　広報広聴係）

有料広告
募集中！
詳しくは、Web または
下記問い合わせ先へ
Web は「有料広告」で検索
☎：0299-48-1111　内線 1212
（秘書広聴課　広報広聴係）